



# 疎 開



終戦の日、「祖国へ帰れる！」と叫びながらスキップをしていた、異国の少女たち

岡村 節子

父親の田舎に疎開し、そこで暮らした6年間

杉田 宗一

地元の人たちの思いやりに助けられた学童疎開

鈴木 榮一

仲間たちと会津で過ごした1年間

中島 光治

河口湖での疎開生活は「わが人生に食べ物なし」

山口 光弘

# 終戦の日、「祖国へ帰れる！」と叫びながらスキップをしていた、異国の少女たち

西欧のミッション系の女学校に通っていた岡村節子さん(84歳)は、終戦の5日前まで毎日の生活を日記につづっていました。疎開先の強羅での生活、終戦の日を目撃した印象的な光景など、当時の日記を開きながらお話しくださいました。

## フランスからファッション誌を取り寄せて

——岡村さんのお生まれは、どちらですか。

神田です。関東大震災で東京は一面、焼け野原になったでしょう。それで神田で商売をしていた父が、5階建ての防火建築のビルを建て、1階と2階を仕事場に、3階・4階を事務所として貸して、5階を家族の住まいにしていたのです。私もそこで生まれましたが、すぐ後に父が飯田橋へ家を建てて一家で引っ越したので

——ご家族は。

父と母と、私たち姉妹が7人です。私は下から2番目で、姉たちとは16歳、12歳、10歳、5歳違って、その下に1歳半違いの妹がいます。

——上のお姉さまとは、だいたい年が離れていますね。

ええ、ですから私の幼稚園へ姉が迎えに来たときに、「今日はお母さまがお迎えね」と先生がおっしゃって(笑)。それを知った父が、「もう少し、娘らしい派手な着物を着せてあげなさい」と母に言ったという話を聞いたことがあります。

上の姉たちが育った頃はまだ戦争も激しくありませんでしたので、ピアノやバイオリン、声楽などのお稽古ごとをさせてもらっていて。小さい頃には姉たちと一緒に音楽会や美術館に連れて行ってもらったのが、楽しみでした。

——戦争前に、そうした華やかな文化があったことが少し意外に思えます。

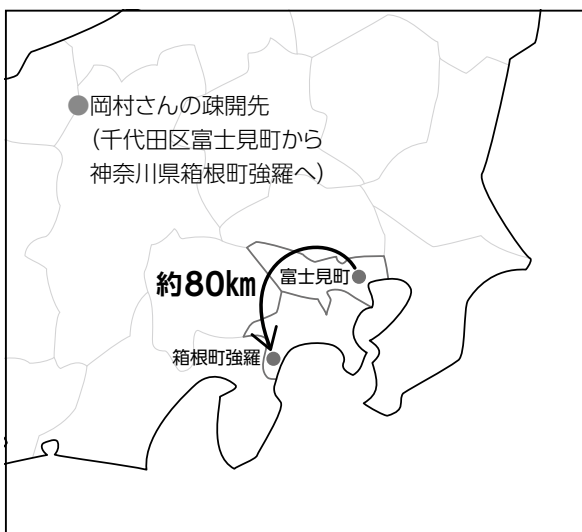
父の仕事の関係で、家には海外のファッションの本などもたくさんありましたよ。姉たちがフランスから取り寄せていた『ジャルダン・デ・モード』(1920年創刊の老舗ファッション



おかむら せつこ  
岡村 節子  
四番町

## インタビュアー

安田律子 (大学院2年生)  
千野彩佳 (高校3年生)  
西山侑里 (高校2年生)



誌)を見せてもらうのが、とても楽しみでした。  
——お父さまは、どんなお仕事をなさっていたのでしょうか。

父は明治の生まれなのですが、まだ日本の方が皆さん和服を着ているときに「これからは洋服の時代だ」と考えて、東京で衣服の仕事に就きました。はじめはトンビという男の方が着るマントを仕立てる店で修業をして、独立して牛込に小売店と自宅を持ったのですが、そこで関東大震災に遭って自宅をなくし、神田へビルを建ててからは、婦人服、子供服などの卸をしました。その後、昭和4(1929)年に『東京婦人子供服製造卸組合』を設立して、繊維工場に洋服用の広幅の生地を依頼し、卸業を手がけるようになったのです。戦前には、麻や木綿、絹、ウールなどの天然繊維を扱って、戦後に化学繊維のナイロンがアメリカから衣服素材として生まれ始めました。

### 紺色に染めたスキーズボンで通学

——学校は、どちうへ通っていらしたのですか。  
両親は、「女の子を電車で通学させては危ない」という考え方だったんですね(笑)。それで歩いて通える白百合(白百合高等女学校附属小学校。現・白百合学園幼稚園)に入りました。  
——戦争中の学校生活では、どのようなことが印象に残っていますか。

戦争が激しくなってきた昭和17(1942)

年からですが、生徒の安全確保や、国からの通達を伝えやすくするために、それぞれの学校へ軍人さんが配備されることになったのです。私たちの学校はミッシヨン系の女子校ですので、生徒はもちろん先生方も女性ばかりでしたから、軍人さんとはいえ男の方が学園の中にいることには、とてもびびりましたね。

——制服などに変化はあったのでしょうか。

空襲にたびたび遭うようになってからは、制服のスカートが禁止になりました。うちには姉たちが使った赤いスキーズボンがあったので、それを紺色に染めてはいてきました。

——色の指定もあったのですか？

いえ、それはないけれど(笑)。でも赤だの黄色だのって華やかな色を着てはいけないような、そういう世の中だったのね。ですから私たちも自然と、紺だの黒だの、地味な色しか身につけませんでした。

——他にも、着る物の決まりはありましたか。

服の胸に白い布を縫い付けて、そこへ名前と、血液型が分かる方は血液型を書いていました。空襲などでケガをしたり亡くなったとき、身元が分かるようにね。昭和20(1945)年3月の空襲のときは、隅田川に飛び込んで亡くなった白百合のお友達が、その名札で分かったという話もありました…。

——ご自宅にも、軍人さんが泊まっていたそうですね。

今の武道館があるところに、当時は近衛連隊



女学校時代の岡村さん



(近衛歩兵第1・第2連隊)があつたのですが、その方たちが寝泊まりする場所が足りなかつたのですね。今のようにはホテルや旅館もありませんから。それでわが家もその場所を提供することになり、2階の客間を夜だけ、5〜6人の軍人さんがお使いになっていました。毎朝、出かける前に「一つ、軍人は…」と軍人勅諭(聖訓五箇条)を大きな声で唱和していたのを覚えています。

その方たちが出征なるときは、私たち姉妹で千人針や慰問袋を作つてお渡ししたものです。

——教科書では読んだことがありますが、どういったもののですか。

千人針は、手ぬぐい巾に赤い糸で、1000人の方に1つずつ糸目を結んでもらうのです。すぐ上の姉が寅年なのだけど、寅年の女性だけは年齢の数だけ結べるのね(寅は「一日千里を往つて、千里を還る」という故事から、生きて帰るようにとの御守り)。「お姉さまはいいわね、15個も結べて」ってうらやましがつたものです(笑)。

慰問袋は父の店から生地をもらつて、姉たちと一緒に縫いました。学校で作つたりもしましたね。

——食べる物に、ご苦労はなかつたですか。

野菜やお米も配給になつて。そのお米も、だんだん手に入らないようになりました。古米(前年に収穫された米)の古米の、古古米にもなつ

てきて。そういう古いお米には、コクゾウムシという虫が湧いているの。でも気持ち悪いなんて言つていられませんから、虫だけ他へ除けていただきました。

——その他の物資も、ごんごんに手に入りになつていきましたか。

私たちは木綿の靴下を履いていたのだけれど、穴が開いても捨てたら次の靴下が入りません。どうするかというと、電球に靴下をかぶせて、糸と針でつくるうのね。それを見ていた父が、「今日の1針、明日の10針」という言葉を見せてくれました。ほころびたら、すぐにつくろいなさい。放つておくと、10針も縫うことになりますよつて。

私は卒業後、『伊東茂平衣服研究所』で2年半パターンとデザインの勉強をし、父の会社(子供服のピノチオ岡村)に、デザインの仕事のため入社しました。そのときの父の言葉を思い出して「トラブルがあつたら、その日に解決しましょう。明日の10針にならないうちに」つてずっと心がけていました。思い立ったらすぐ実行。その教えは、本当に役に立ちました。

## B29に体当たりして墜落した 日本軍の飛行機

——空襲の体験を、聞かせていただけますか。

まず印象に残っているのは、灯火管制ですね。夜に建物から明かりが漏れると、そこをめぐり



日本武道館南に建てられている近衛歩兵第1連隊の碑と第2連隊の碑

### 慰問袋

薬品、たばこ、石けんなどの日用品や武運長久のお守り、慰問文を入れて戦地の将兵に贈られた布袋。袋は、各家庭で作つたが市販品もあり、中身の入つた既製品も売られていた。

て爆弾を落とされるといので、電灯の笠に黒い布をかけて光が漏れないようにしたのですよ。たしか上をスカートのようなギャザーにして、すっぽりかぶせたんだと思いますよ。

爆風でガラスが割れても飛び散らないように、窓には細く切った紙を十字に貼りました。

——初めて空襲に遭われたのは。

富士見町は、3月10日の空襲でずいぶん多くのお家が焼けました。幸い私たちの家は無事でしたが、坂の上にあるお友達の家が燃えているというので、駆けつけて行ってバケツリレーに加わりました。当時はお家の前にコンクリートの防火用水があつて、そこから水を汲んで火にかけるんです。

でもそんなものじゃ間に合いませんね。結局、その方のお家は焼けてしまいました。

——その時は、どのようにお感じでしたか。

恐怖ですよ。ただただ、恐ろしかった。それまで空襲のときは建物の中にいましたから、初めて頭上をB29が通り過ぎるのを体験したのです。

——どんな印象ですか。

大きい！見たことのないくらい大きな飛行機がわーっと飛んできて。シヨックでした。「これじゃあ負けるわ」って、ふと思った記憶があります。そんなこと口にしたら、大ごとでたでしょうけれど。

——岡村さんご家族に、被害はなかったのですね。

ただ神田のビルに、焼けた電信柱が倒れてきて、部屋が燃えたという知らせがありました。幸いすぐに消し止められたそうですが、そのとき母が、家にあつたなけなしのお米を炊いておにぎりにして「火を消してくださった皆さんにさしあげてちょうだい」と、同居していた父の甥に届けさせていました。

——その後も、空襲は続きましたね。

4月には、麴町から九段のあたりも爆撃に遭つて。白百合の校舎もその時に焼けてしまいました。

——その後も、富士見町にいらしたのですか。

とうとう危ないというので、姉夫婦の住んでいた中野に移ることにしました。千代田区のような中心部よりは、まだ安全ではないかと考えたのでしよう。

でも中野にも、やはり空襲がありました。ある日のお昼間、上空にB29が飛んできました。そこへ日本軍の飛行機が体当たりしたのも見えたのだけれど、B29の大きさに対して、日本の飛行機はととても小さくて。壊れた機体からばらばらばらと、兵隊さんがパラシュート——敵性語だから、当時は落下傘と呼ぶなければいけませんでしたね——で、降りてくるのも見えました。

B29は、何ともないように平気で飛び去っていきました。その光景も、シヨックでした。何とも言えなかつたですよ。

当時は高射砲というのもあつて、敵機に向



#### 防火用水

空襲による火災に対する備えとして各地域・家庭に貯水槽や浴槽に、常時水を蓄えておくことが要求された。防火用水は、戦時中いたるところに置かれていた。今でも道端で植木鉢などに使われていることもある。

かって地上から攻撃をするのだけだ。B29は遙か上空にいるのに、打ち上げた砲弾は途中でふわーんって落ちてきてしまっ。これじゃ当たらないなあって、そんなふうに思っていました。

### 強羅で迎えた終戦の日

——疎開は、なさらなかったのでしょうか。

私たちの学校は、昭和19（1944）年に箱根強羅へ土地を購入して修道院と教室、生徒たちの寄宿舎を開きました。この施設に、まず初等科の生徒から疎開をさせたのです。私の家でも、翌年に妹が先に強羅へ向かいました。

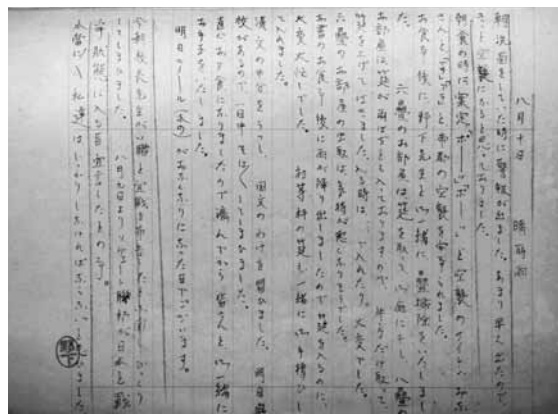
私は高女2年（中学2年生）の6月に強羅へ行って、下級生の面倒を見ながら、修練として畑でお芋を作ったり、合間にお勉強もしていました。

——これが、その時の日記ですか？

ええ、少し読んでみましょうか。

「朝洗面をしていたときに、警報が出ました。あまり早く出たので、きつと空襲になると思っておりまして。朝食のときに案の定、ぱーぱーと空襲のサイレンが鳴りました。帝都の空襲が案じられました。

お食後に、先生と一緒に畳掃除をしました。お部屋にはござ（いぐさの茎で編んだ敷物）が敷いてあって、みんなで片方だけござを上げて掃きました。その中には蚤がたくさんいて、気持ち悪くなりそうでした。お昼のお食後には雨



疎開先で岡村さんが書きつづっていた鍛練日記

が降り出しましたので、ごぎを入れるのが大変でした。

漢文の半分を写して、あとは国文の訳を習いました。明日は学校があるので、1日中そわそわしてしまいました。すぐに夕食になりましたので、すんでから皆さんで、お手玉をいたしました」

——最後の「お手玉」というところだけ、女学生らしい生活が感じられます。

お手玉や、トランプをしました。トランプも英国のものだから禁じられていたかもしれないけれど、持って来たお友達がいたんですね。私は本を読むのが好きだったから、『宮本武蔵』（吉川英治著）を全巻持って読んで読んでおりました。

同じページに、8月10日の日記もあります。「8月9日よりソビエト連邦が日本と戦争状態に入る旨、宣言したとのこと。今朝、校長先生からお話があり、本当に本当に、わたくしたちがしっかりしなければと思いました。晴れ、ときどき雨」

これが、日記の最後です。——それでは終戦は、強羅の疎開先で迎えられたのですね。

ええ。先生方と一緒に正座をして、ラジオを聴きました。でもガーガーと騒音ばかりで、ほとんど内容は分かりませんでした。先生が「戦争は終わりました」と静かな声でおっしゃって、それでやっと放送の意味が分かったのです。

——その時の、お気持ちは。

その少し前から、一緒に疎開をしていたお友達と「こんなこと、いつまでしているのかしら」「私たちはいつ東京へ帰れるのかしら」と話していました。

ですからもう空襲はない、逃げなくていいのだとは思いました。でも——気持ちは複雑でしたね。

——終戦の日で、他に覚えていらつしゃることは。ラジオを聴いた場所から、別棟の宿舎に戻ろうとしたときのことです。突然に、「祖国へ帰れる、万歳、万歳！」という喜びの声と一緒に、スキップを踏んで踊り跳ねる、異国の少女たちが目に映ったのです。

——外国人がいたのですか？

私たちもそれまで全く知らなかったのですが、交換船の「浅間丸」でアメリカから日本まで来たものの、ヨーロッパまで帰ることができず、そのまま強羅のキャンプへ足止めされた方々がいたようなのです。

そうして不自由な抑留生活を続けていたフランスやイタリアの少女たちが、戦争が終わったと知らされたのでしょうか。その子たちはスキップをして、私たちはそれを複雑な思いで見っていました。終戦の日というと、今も思い出す光景です。

——敵国の人たちですよ。反感はなかったのでしょうか。

いいえ！ 私たちの学校はフランス人のマ

#### 高射砲陣地

本土空襲の敵機を撃退するための中小口径の砲を備えた拠点。東京周辺や軍需工場地帯の周りに重点的に配備されたが、射程距離が不十分で、高度1万メートル以上を飛ぶ米軍機に対しては予期したほどの戦果は上げられなかった。



幼少期から使っているテーブルとチェア

スール（先生）も大勢いらっしやいましたから。子供同士、「あの方たちも戦争が終わって良かったわ、お互い家に帰れるんだもの」と思ったはずですよ。

### 焼け焦げた母校で再開した授業

——戦後のお話を、お聞かせください。

終戦を迎え、私と妹は強羅から戻って、5歳上の姉と両親とで富士見町の家に戻ってきました。

——身内の方で、戦争中に亡くなった方はいたのでしょうか。

3番目の姉の義兄が召集され、ミンダナオ島で戦死しました。1番上の姉の義兄もだいぶ年長でしたけれど赤紙が来て、出征しました。

そういえば今思い出したけれど、義兄が戻ってきたときに私たちも中野の姉の家にいたのですよ。軍服姿で戻ってきた姿を見て、私たちも喜んで「お義兄さま！」と駆けよろうとしたら、「そばへ寄るな！」ってすごく怖い顔で言われた。「お義兄さま、何を怒っているの」といったら、シラミがいるからお湯を沸かせと。庭でお湯を沸かして、軍服を消毒したんです。その時の義兄は、汚れた服で、がりがりに痩せて。なんだか別人のようで、恐ろしかったのを思い出しました。

姉はとても喜びましたね。というのも、義兄が出征したあとに赤ん坊が生まれていたので



戦後、学園に戻った教室で。机はベニヤ板



す。ところが戦争末期で物資も不足して、栄養失調で亡くなってしまったのね。やっと歩きだしたって、みんな喜んでいたところだったのに。それが、義兄が帰るわずか10日前でした。

——お義兄さんは、会えなかったのですか。

ええ。母は「ベビーは、親の代わりに亡くなったのでしよう」と言っていました。

——他のご家族は。

2番目の義兄は台湾で「台湾電力」の仕事をしていた、4番目の義兄は満鉄にいました。それぞれ、家族と一緒に終戦後に引き揚げ船で戻ってきましたが、着の身着のまま、たいへん苦労したと聞いています。それでも、無事に戻ってこれただけ良かったと思いますよ。

——学校は、すぐに再開されたのですか。

ええ、でも空襲後に初めて学校へ足を踏み入れたときは、あまりの変わりように驚きました。崩れ落ちた屋舎のコンクリートや補強の木材を見ながら、涙が止まらなかったのを覚えてます。

再開後の教室は、黒板の横や壁に焼夷弾で焼けた跡が残っていました。机はニスも塗っていない、薄く反り返った板。椅子はベンチのような3、4人がけのものでした。それでも私たちは、空襲中に停電したときに常備していたロウソクをみんなで持ち寄って、机や廊下を磨いたものです。少しでも校舎がきれいになるようにと思って。

——そうした体験を通じて、私たち若い世代に

伝えたいメッセージはありますか。

戦争は「無」です。人を殺し合って、いいことなど何もありません。

あなた方にも、この先の未来に生まれる方々にも、日々の平和と幸せに感謝をして生きていってほしい。そして何か一つ目的を持って、自分の生きる道を進んでほしいと思います。その目的を達成して、「私は自分のしたいことをしたわ、幸せだったわ」と思えるような人生をね。私がまさに、今そう思っているのです。戦後に一生懸命勉強して、外国でも学んで、日本の子供さんたちのために洋服を作り続けてきました。もちろん悲しいこと、苦しい思い出てもいっぱい胸の中にあるけれど、それは全部捨てて。皆さんに喜んでもらえた、そのことだけを大事にしています。

——もし戦争がなかったら、ご自分の人生は変わっていたと思いますか。

ある意味で両親の会社でデザイナーの仕事をしてきたので、その点では変わりはなかったと思います。

ただ、物を大切にする心は育まれたかもしれません。私は今も、着られなくなった洋服はハサミで小さく切って、そのへんを拭いたりしてから捨てるんです。その時も、心の中で感謝の言葉を唱えるのね。「ありがとう」とか「メルシー」とか（笑）。もし戦争中に靴下をつくるような苦労をしなかったら、どんなわがままに育っていたかと、今になって思います。



写真左から、安田さん、西山さん、岡村さん、千野さん

# 父親の田舎に疎開し、そこで暮らした6年間

損害保険業を辞した後、四番町町会長を8年間務めていた杉田宗一さん(83歳)。東郷小学校(現在の九段小学校)6年生のときに埼玉県嵐山町に縁故疎開し、高校3年生まで6年間を過ごしました。陸軍が闊歩していたという四番町の当時の様子や終戦後の状況、疎開先での生活についてうかがいました。

## 「軍艦ごっこ」で遊んだ小学校時代

——まず、杉田さんご自身についてお聞かせいただけますか。

昭和7(1932)年、四番町で生まれ、育ちました。男2人、女3人の5人きょうだいで、私が長男です。昭和19(1944)年、小学6年生の2学期に埼玉県嵐山町に縁故疎開し、終戦は中学1年生のときに迎えました。終戦後は、高校3年生までそのまま埼玉で過ごしました。疎開で6年間離れましたが、あとはずっと四番町に暮らしています。

——小学校はどちらですか。

東郷小学校(現在の九段小学校)です。もともとは、上六小学校という名称でしたが、東郷さん(東郷平八郎)のお屋敷の隣にあるということで、東郷小学校になったようです。私が入

学したときには尋常小学校でしたが、途中で国民学校に変わりました。

——当時の東郷小学校の様子を教えてください。

東郷小学校は1学年2クラスです。定員は1クラス50人ですから、全校生徒は600人。男女別学なので、男組と女組がありました。当時の麴町区には、今の東京地方裁判所のところに日比谷小学校があり、そこがいちばん小さくて、その次に小さいのが東郷小学校でした。小学4年生のときだったか、日比谷小学校が廃校になって、先生が「これで東郷小学校が麴町区でいちばん小さい小学校になった」と言ったのを覚えています。

——当時はどのような遊びをしていたのですか。

お昼休みには「軍艦ごっこ」というのをよくやりました。はっきりとは覚えていませんが、戦艦、巡洋艦、駆逐艦などと優劣を付け、お互



すぎた そういち  
杉田 宗一  
四番町

## インタビュアー

安田律子 (大学院2年生)  
長嶋 泰 (大学1年生)  
松崎璃々花 (中学1年生)

い逃げ回って捕まえる遊びです。

——鬼ごっこのようなものですか。

いえ、鬼ごっこは鬼が1人で、ただ捕まえるだけでしよう。そうではなくて優劣が付いている。たしか、戦艦がやられてしまうと全員負けになったのかな。

——子供たちの間では海軍が人気だったんですね。

格好いいですからね。当時、男の子はみんな海軍に憧れていました。

——ただ、このあたりは陸軍の人がよく歩いていたのではないですか。

多かったですよ。今の陸上自衛隊のところが多かったですよ。その後、参謀本部になりましたから。将校が馬に乗り、うちの前を通って出勤して行くんです。馬糞なんかも落ちていました。兵隊が後ろについて歩いて掃除をしていたみたいです。

——女の子はどんな遊びをしていたのですか。

組が違うからよく分かりませんが、ゴム跳びをやっていたようです。輪ゴムを紐状につなげて遊ぶ遊びです。ピンと張っておいて、高さをおだんだん上げていく。背丈よりも高く跳べる子もいましたね。

——昭和16（1941）年に太平洋戦争が始まりましたが、戦争が始まりそう、もしくは始まったという感覚はありましたか。

私が子供の頃から中国と戦争していましたが、定期的に防空演習がありました。警戒警報や空襲警報のサイレンが鳴って、電気を防空演

習用の電球に取り替えたり、白熱灯の電気に布をかぶせて暗くしたり。小学校へ入る前からやっていましたね。年に2回くらいはあったのかな。子供だから怖いという感覚はなく、年中行事という感じでした。

——疎開についてお聞かせください。

昭和19年、小学校6年生の2学期から集団疎開が始まり、3年生以上が強制的に疎開させられました。その前に、学校から縁故のある方ができるだけそちらへ疎開したほうがいいという勧めがありました。集団疎開の場合、麴町の小学校はみな山梨県が疎開先です。山梨県は食糧事情があまりよくないため、なるべく縁故疎開を勧めたようです。また、集団疎開のほとんどの疎開先は旅館でしたが、その当時の旅館というと商人が泊まるような宿。どこの田舎にも中心地にそういう宿がありましたが、もちろん、今のような綺麗なホテルではありません。

私はたまたま父親の田舎が埼玉県の嵐山町だったので、そこに縁故疎開しました。最初は弟と2人でしたが、昭和20（1945）年3月の空襲の後で姉妹が、5月の空襲の後で母親が合流しました。父親だけ四番町に残っていました。父親は弁護士で、隣組の組長を務めていました。

### 疎開先では農作業を手伝う

——疎開先では地域の学校に通うのですか。い



杉田さんが通学していた東郷小学校（建て替え前の九段小学校）

### 隣組

昭和15年9月、内務省訓令で防空演習や国債割り当てなど、上意下達を目的とした「隣組」体制が整った。連絡事項を記した回覧板が各家庭に回され、常会が班ごとに開かれた。「とんとんとんからりと隣組」は全国で歌われることに。

じめなどはありませんでしたか。

地元の小学校に編入しました。教科書は国定教科書で日本中同じですから問題ありません。はじめも多少ありましたよ。というのも、都会の子は機敏きびんというか、すばしこいもんだから、授業中でもすぐにパツと手を挙げたりする。そうすると目に付くんですよ(笑)。生意気に映ったんでしょうね。

—— 中学校に上がるときはどうしたのですか。

田舎の中学にそのまま進みました。当時、義務教育は小学校までですから、県立の旧制中学校に試験を受けて入りました。試験は口頭試験だけで筆記試験はなかったです。試験の内容は、一応日本はまだ勝っているということだったから、占領地の名前などを挙げさせられたりしましたね。

—— 疎開先での食糧事情はどのようなものでしたか。

父親の実家が農家でしたから、それほどひどい状態ではなかったです。私の疎開した東武東上線の沿線は、地形上あまり水田がないんですよ。たいてい二毛作にもうさくで、春は麦、秋は米を収穫するという組み合わせが多い。その頃は、とにかく採れるものは何でも栽培しました。畑には春は麦とジャガイモ、秋はサツマイモと、「おかぼ」といって水田でなくても栽培できる陸稲を作っていました。お金になる米をできるだけ売って、自分たちが食べるのは麦。ですから、だいたい麦ご飯です。あとは、小麦が採れるか

らうどんですね。サツマイモの産地でもありませんから、サツマイモもよく食べました。

—— もう食べたくないものはありますか。

しいていえば…小麦粉が配給になるんですが、精製の仕方が悪い物がくると、うどんを作っても汁に溶け出してしまいうから、すいとんにでもしないと食べられない。すいとんでも、温かいうちはいいのですが、冷めてくるとドロドロで、のりを食べているような感じでした。

—— 疎開先の農家に、食べ物を求めてやって来る人はいましたか。

地元の人でそういう人はいなかったですね。農家はみんな、米や麦、芋きよしめつを供出きょうしゅつさせられるんですが、自家用の米は確保してよいことになっていましたから。戦争中、農家は優遇ゆうぐされていたんですよ。街の人よりもひどい食糧事情ではなかったです。埼玉県がある程度、作物の採れるところだったからかもしれません。

—— 都会の人たちはやって来ましたか。

来ていましたね。買ったたり、着物などと物々交換したりしていました。食料品はみんな統制とうせいがかかっていたので、街から来る人はそれを仕入れて内緒で売るんです。みんなリュックサックで山のように積んで電車に乗るから、床が下がるほどでした。当然、統制品ですから、警察が途中の駅で一斉取り締まりをやる。いきなり電車に乗ってきて「故障のため車両交換します」と言っって、荷物を下ろして全部没収するんです。東武東上線の場合だと、川越駅がちょうど車



庫で、そこで取り上げるわけです。そうすると、地元の食糧事務所にそれが回る。川越市の食糧事務所は非常に食糧豊富だという噂がありました（笑）。

——疎開先ではどういう生活でしたか。

疎開したのは小学6年生の2学期からですが、田舎の小学校は田植えと稲刈りのときは、手伝いのためにお休みになるんです。父親の実家は農家だったから、放課後は手伝っていましたし、他の農家に行つて稲刈りなどの農作業もしていました。

——都会育ちとしてはどうでしたか。

農作業はもちろん、地元の人たちとの付き合いもある。今までの暮らしと全然違う世界がそこにはありました。その頃は辛かったけれど、いい経験をしたなと思います。

——中学校での生活はどうでしたか。

中学校に入ると、私の1学年上の先輩たちはもう勤労働員に駆り出されていました。私が行つたのは埼玉県立松山中学校ですが、すぐ近くにディーゼル機器の工場があつて、1年生の2学期から工場へ通うんです。朝からですが、一応先生がいて、授業そのものはあつたらしいです。2学期まで戦争が続いていたら、私も工場へ行くことになっていました。たしか、夏休みは1週間しかなく、始まりが遅かった。2学期から勤労働員で授業時間が短くなるからだと思いますが、ギリギリまで授業をしていました。その1週間の夏休み中に8月15日を迎えて、

結局8月末まで夏休みになったと記憶しています。

——中学校では軍事教練はありましたか。

よく軍事教官にいじめられたという話が出ますが、私がいた学校はそんなことはありませんでした。もちろん、竹槍や木の棒で訓練はしていましたが、軍事教官をそんなに怖いと思わなかった。たまたまいい教官だったからかもしれません。学校によってかなり違いはありますね。教官から「お前ら、アメリカ兵が落下傘で降りてきたらどうする」と聞かれ、「竹槍で戦います！」と答えたら、その教官が感激して。たいてい中学校の先生は生徒と一緒に弁当を食べないんですが、教官は「感激した！」と教員室から弁当とやかんをぶら下げてきて、一緒に昼食をとつたこともありました。その教官は、戦争が終わつたら「マッカーサーに嫌われるから、おれは先生を辞める」と言つて農家になりました。よく映画などで軍事教官にいじめられるシーンが出ますが、全部が全部そういうわけではないと思います。

——空襲の恐怖はありましたか。

私自身は疎開していたので、東京の空襲は経験していません。ただ、疎開先でも機銃掃射がありました。空襲警報解除が出て、みんな防空壕から出てきたところだったので、いきなり頭の上で機関銃の音がしてびっくりしました。狙われたのは工場で、そこで働いていた1学年上の先輩2人が怪我をし、亡くなった工員

#### 軍事教官

学校での軍事教練は大正14年から正課とされたが、昭和10年には中学校以上に将校が配属された。軍刀に革長靴姿で、学生・生徒に銃剣術や銃操作を訓練、指導した。



富士山を背景に揃って通学（永田町国民学校／山口光弘さん提供）

もいると聞いています。

終戦の前日にも熊谷が空襲を受けました。私  
が住んでいた場所から山を隔てたらすぐ熊谷な  
んですが、山の裏側が真っ赤になって。その頃  
しきりに、米軍が山に焼夷弾を落として山火事  
を起こすという噂が流れていたんです。てっき  
りそれが始まったのかと思つて怖かつたです  
ね。

——戦争が終わったときは、どのような気持ち  
でしたか。

もちろん、悔しいという気持ちはありました。  
ただ、これで電気を普通につけて明るくでき  
るんだ、もう何も心配しなくていいんだと思  
いました。

### 空襲で焼けた自宅と終戦後の生活

——東京の空襲で四番町の自宅はどうなりま  
したか。

四番町のあたりは2回やられています。昭和  
20年3月10日は神田から九段の上あたりまで、  
5月25日に残りがやられ、自宅も完全に焼  
けました。

うちは庭に防空壕を掘っていましたが、商店  
街には掘る場所がない。だからみんな家の床  
下に防空壕を掘っていました。ただし、そこ  
に逃げ込んだために焼け死んだ人もこのあた  
りにはいました。

空襲後、すぐに陸軍がやってきて、帝都防衛

宮城防衛のために陣地を作ったんです。うちの  
玄関の右側は少し高くなっていますが、前の道  
まで同じ高さになっていて、そこに東郷坂教会  
がありました。関東大震災のときにレンガ造り  
の建物が焼け落ちたんですが、残っていた土  
台に穴を掘って高射砲を持ち込んでいました。終  
戦後、自宅に戻つてみるとその台座が残つて  
いて、うちの庭にも塹壕が掘られていました。

空襲後、軍隊が入り、すぐに電線を引いたお  
かげで、電気は使えました。焼け残った樹木を  
電信柱の代わりにして、低い位置に電線を張り  
巡らせていました。ただし、個人の家の前ま  
では電線を引いてくれませんが、あとはそのま  
ま。被覆線ではなく裸線なので、けっこう危な  
かつたですね。

——お父さまが隣組の組長だったということ  
ですが、戦争中、組長ならではの苦労はあつた  
のでしょうか。

父親は食料品の配給を担当していました。た  
だ、肉の配給があると、鶏、豚、牛と全部持  
つてこられる。それを住民に配るのですが、最  
初の頃はそれほどみんな逼迫してないから、  
いいものを欲しがります。多少見栄もあり、「何  
にしますか」と聞くと、「お肉」と。このあた  
りだと「お肉Ⅱ牛肉」なんです。分け方をど  
うするか困つて、肉屋さんにどの家がどのお肉  
を使っているかを聞きながら配つたりしたこと  
もあつたと言っていました。

——配給する側も大変ですね。



河口湖で貝採りをして食料を補給 (山口光弘さん提供)

物流が悪かったですから。東郷坂を上がり  
きった北進社という印刷会社のあったところは  
もともと牛乳屋で、自分のところで精製してい  
たんです。戦争中に統制になって明治乳業の販  
売店になったのですが、牛乳がうまく流通して  
いないものだから余ってしまつて。3月の九段  
の空襲のときには、持って行き場のない牛乳を  
消火に使つたと聞いています。とにかく戦争末  
期は、物の流れが偏つていました。あるところ  
にはありましたが、流通しない。ガソリンがな  
いからトラックで運搬できないんですね。

それから、このあたりはお屋敷が多く、いつ  
も門が閉まつていて、防空演習をするときに門  
を開けてくれない。協力してくれないんです。  
「門を開けろ」と言つと「旦那さまが留守で」  
と返事がある。「中に爆弾が落ちたらそんなこ  
とは言つてはいられないよ!」と言つて開けさ  
せたそうです。

——自宅が焼けたとのことですが、終戦後はど  
うしたのですか。

最初は防空壕で暮らしていました。というの  
も、うちの敷地は兵隊が陣地造営のため、塹壕  
を掘り、半地下の兵舎を作っていたんです。終  
戦後、兵隊がそのまま放り出して帰つたので、  
しばらくそこを使つていました。けつこう広  
かったですね。どこからか木材を持ってきて屋  
根を作っていましたので、普通よりもずっと  
しっかりした防空壕でした。

——完全に家が復旧するまで、どのくらいか

かつたのですか。

5年くらいです。昭和25（1950）年に完  
全にはないけれど、一応まともな家になりま  
した。軍隊が作った防空壕の廃材も使いまし  
たね。戦争中に強制疎開というのがあって、大切  
な施設の近くにある家や延焼しそうな家は強制  
的に壊されたんです。その廃材がそこらへんに  
たくさん保管してあつて、その材料をもらつて  
きたりしていました。

昭和25年に私は疎開先から完全に四番町へ  
戻ってきましたが、その頃、ちょうど朝鮮戦争  
が始まつたんです。また空襲が始まるのではな  
いかと両親が心配していたのを覚えています。

——最後に、戦後70年を迎えて、これからの私  
たちがどのようなことを考え、行動していくべ  
きか、メッセージをお願いします。

国を守ることは大事ですし、そういう権限が  
国にはあると思いますが、ただ威圧的に物事を  
決めつけるのでは間違つた方向に進んでいきま  
す。みんな他人の話をよく聞いて仲良くやつて  
いくことが大切だと思います。町会長をしてい  
ますと、いろいろな町会の話聞く機会があり  
ます。町内には新しい人たちもたくさん増えて  
います。新しい人たちを排除することなく、一  
緒になつて、うまくコミュニケーションが取れ  
る町づくりができたらと思っています。



写真左から、長嶋さん、松崎さん、杉田さん、安田さん

# 地元の人たちの思いやりに助けられた学童疎開

鈴木榮一さん（83歳）は、父親が東紺屋町（現・岩本町）で商売を始め、のちに会社を興し、現在はステンレス製バルブなどを扱う「鈴木治作株式会社」の代表取締役会長です。小学校6年生のときに群馬県高崎市の長純寺に集団疎開し、中学受験で東京へ戻ってきて空襲に遭遇。当時の店の様子や、疎開先での生活についてお話をうかがいました。

## 徴兵で店員が次々に出征していった

鈴木さんの年齢とお住まいをお聞かせください。

私は昭和7（1932）年生まれで83歳、住まいはずっと北区の東十条です。

父親が戦前からずっと千代田区の岩本町2丁目（当時は東紺屋町）で商売をしていました。店は空襲で焼きましたが、終戦後に同じ場所で商売を再開し、会社を設立しました。私の代になってから土地を少しずつ買い足して、現在の規模になりました。

お父さんはどのような商売をされていたのですか。

戦前は、鉄板や鉄の丸棒など、鉄の材料を販売していました。特に売れたのは風呂屋関係のものです。東京都になる前の東京市は人口が増

え続けていました。その当時、東京の一般家庭には内風呂はなく、風呂屋（銭湯）に通っていましたが、風呂屋もほとんどできません。1軒の風呂屋で1日2000〜2500人の利用者がありました。風呂屋の奥には薪で焚くお釜があり、そこでお湯を沸かしてパイプで運び、カランからお湯や水を出すわけです。うちはそのお釜やカラン、蛇口などの材料となる鉄をメインに扱っていました。

当時の日本はどのような状況だったのでしょうか。

私の生まれた昭和7年は、日本が満州を侵略した年です。その頃から日本が強くなってきました。昭和12（1937）年には日中戦争が始まり、だんだんと状況も変わってきました。兵隊もたくさん必要となり、若い者がどんどん徴兵され、兵隊に駆り出されていきました。

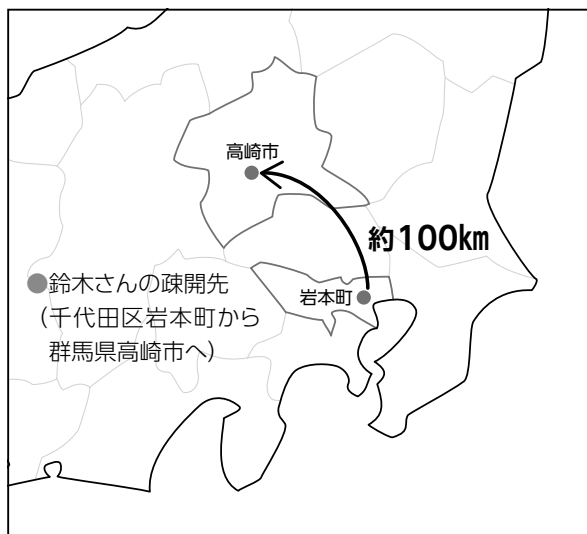


すずき えいち  
鈴木 榮一

岩本町

## インタビュアー

泉 政秀（区内在勤者）  
横山嶺州多（中学3年生）





うちのよな店の店員は、たいてい尋常小  
学校を卒業してから2年間高等小学校へ行き  
(年代によっては国民学校を卒業してから2年  
間高等科に行く)、それから店に入ってきてます。  
それが20歳になると徴兵検査に行きます。鉄関  
係の仕事をしていて身体もよいから、みんな甲  
種合格です。特に日中戦争が始まってからは、  
徴兵検査に受かったらすぐに召集されるようにな  
りました。うちの店員もほとんどが出征しま  
した。東紺屋町は商業地区で、昔は店員も多く  
て賑やかでしたが、それがどんどん兵隊に行っ  
て、最後は火が消えたようになりました。

## 「ヒトラーユーゲント」に旗を振る

——戦争が始まり、生活が大きく変わっていく  
という感覚はあったのでしょうか。

1日や2日で戦争になるわけではありませ  
ん。日本の場合は昭和になってから、軍隊でも  
過激な人がどんどん出てきました。政治家が殺  
され、活発な人間や威勢のいい人間が力を持っ  
てきた。物事を正確に考えていたおとなしい人  
たちは黙ってしまふ。満州事変はその顕著な  
例です。

——世の中はまさにそのような動きだったので  
すね。

昭和12年12月、南京が陥落したときはすぐ  
かったです。私が小さい頃ですが、宮城の前で  
旗行列をやりました。当時、市電が走っていま

したが、銀座通りでは飾り付けをした花電車も  
出ました。日本とドイツの同盟強化に伴って、  
昭和13(1938)年にはドイツの若い青年団  
「ヒトラーユーゲント」も20人くらいが日本へ  
来ました。そのときは歓迎するというところで、  
「万歳ヒットラー・ユーゲント」という歌まで  
ありました。私も参加してかぎ印の旗を持って  
振りました。

それから日本はドイツを真似して統制経済を  
導入しました。配給制になったんです。配給制  
になると、食べ物をはじめ何もかもが配給です。  
お米は1日2合でした。小学生の頃は、運動靴  
は1年に2足しか配給になりませんでした。だ  
からほとんど下駄です。戦争中は学童疎開をし  
ましたが、靴ではなく、足袋で下駄を履いてい  
ました。

——お父さんの商売のほうはどうだったのだ  
でしょうか。

一般的に働いている人は、第1次産業や第2  
次産業より第3次産業に従事している者が多い  
です。徴兵は第3次産業からどんどん人を吸い  
上げます。人もいなくなり、景気も悪くなって  
いって、昭和17(1942)年頃からだんだん  
と商売というものができなくなりました。うち  
も工場も閉めて売り、そのお金で埼玉県の川口  
に田んぼと畑を買いました。うちはきょうだい  
9人、家族全部で11人いましたから、農業をやっ  
て配給と田んぼでなんとか食いつなごうと。戦  
争が終わるまで、うちは田んぼや畑を作りなが



鈴木さんが疎開した群馬県高崎市長純寺上空の航空写真

### 満州事変(支那事変)

日中戦争のこと。北京郊外豊台に駐屯の日本軍歩兵  
隊が、昭和12年7月7日、盧溝橋付近で中国軍と衝突。  
一時は停戦したが、交渉不調のまま日本側は本格派兵  
に踏み切り、宣戦布告なしに全面戦闘に入り、太平洋  
戦争にまで拡大した。

ら生き延びたのです。

——空襲はいつ頃から始まったのでしょうか。

東京で最初に空襲があったのは、昭和17年4月、私が小学校4年生のときでした。飛行機が来てから空襲警報が鳴りました。学校の上を飛行機が飛んでいき、板橋の方に爆弾を落としました。

——そのとき鈴木さんは学校にいたのですか。

学校にいました。ちょうどお昼頃だったので休み時間中で、教室の窓から飛行機を見ていました。飛行機が通り過ぎてから先生に「みんな校庭に出ろ！」と怒鳴られて出たのですが、防空壕があるわけでもないし、避難訓練などもまったく行っていなかったもので、どこへ逃げたらよいか分かりませんでした。

昭和19（1944）年にサイパン島が陥ちたときに、これからは東京も空襲されるということで、東京の子供たちを地方へ避難させようとしたんです。

——それで学童疎開が始まったのですか。

そうですね。終戦の1年前ですね。サイパン島が陥ちたのが7月ですから、それから1カ月くらいで、田舎に親戚のある人は縁故疎開、いない人は群馬県や長野県、山形県などに集団疎開と、とにかく小学校3年生以上を東京から避難させようとしたわけです。

——小学3年生以下の子供はどうしたのですか。

小学1・2年生は東京にいましたが、田舎の親戚に母親と一緒に引ったり預けたりと、でき

るだけ縁故疎開するよう勧められました。

### 榛名山のふもとのお寺に疎開する

——鈴木さんはどこへ集団疎開したのですか。

私の小学校は王子区（現・北区）の稲田国民学校で、8月末に3年生から6年生までが群馬県に疎開しました。温泉旅館へ行くケースが多かったですが、うちの小学校は、校長がぐずぐずしている間にそういうところがなくなってしまうんです。しょうがなくて、榛名山のふもとの4つのお寺に、60人くらいずつ分かれて疎開することになりました。私は高崎市の長純寺というお寺でした。

8月31日の朝6時に小学校の校庭に集まり、赤羽駅まで歩いて行き、そこで両親と別れました。それから汽車に乗り、高崎駅で木炭で動く乗合自動車に乗り換えて疎開先へと向かいました。

——疎開が決まったときは不安でしたか。

よその学校は、学年別に分かれて疎開したところも多かったようですが、私の学校は地区で分かれたため、弟も一緒でした。兄弟姉妹が一緒という人がけっこういましたので、そんなに不安はなかったですね。それでも、最初は遠足気分でニコニコして行きましたが、お寺に着いて夜になると泣いている子もいました。

学童疎開は先生も一緒に行くのですが、拒否する先生もけっこう多かったのではないでしょ



長純寺の学童疎開石碑

うか。1つのお寺に男の先生が1人、女の先生が1人、合計2人くらいしか同行しません。それで60人の生徒の面倒を見るのだから大変です。私たちの先生はとてよく世話をしてくれました。

——疎開先での生活を教えていただけますか。

私たちはとても恵まれていたと思います。お寺の和尚おしょうさんが本当に一生懸命努力してくれました。また、村の助役さんはじめ、村の人たちもとても親切にしてくれました。

けれども、急に疎開先に決まったものだから、お寺も受け入れ態勢がまだできておらず、行ったらお風呂がありません。トイレは1つありましたが、1つではどうしようもない。トイレは増築中で、臨時のトイレは本堂の前に穴を掘ってむしろで囲ってありました。とにかく、お風呂がないのがいちばん困りました。

——お風呂はどうされたのでしょうか。

和尚さんが村の人たちに話をしてくれて、お風呂が完成するまでは、民家1軒に3〜4人が「もらい風呂」をしに行きました。毎日は無理ですから、1日おきくらいです。当時の農家のお風呂は木でできた小判型のもので、私たちが行ったときはちょうど8月でしたから、最初は家の外の土間に出て風呂を焚いてくれました。

——寂しがる子はいなかったのでしょうか。

私は上級生ですから、下級生の面倒もよく見ました。私のお寺では落伍者らくぶつしゃはいなかったけれ

ど、よそのお寺では東京まで逃げ帰った者もいたそうです。そうになると、手紙を検閲けんえつするなど管理も厳しくなります。もちろん最初の頃は、親が来てはいけない、来ても会わせないと面会に關してはうるさかったです。会えば帰りたくなるでしょう。9月は誰も面会に来ませんでした。10月半ば頃からやっと解除になって、母親たちが面会に来るようになりました。

疎開した年の12月頃からB29が飛んでくるようになり、東京に爆弾が落とされたという話を聞くようになりました。

——疎開先の食事はどのようなものでしたか。

私の小学校の中でも、私が行ったお寺がいちばん良かったです。田んぼや畑も多く、農業が主体の村でしたから。村の助役さんがいろいろと尽力じんりきしてくださり、ほとんどお米のご飯でした。最初に学校で申請した人数よりも、実際に疎開した人数が減っていたのですが、その分の配給が減らされていなかったのもあったようです。

食事にはカレーライスも出ました。もったもカレーライスといっても、肉は入っていません。群馬はコンニャクの産地ですから、肉のかわりにコンニャクが入っていました。うどんもよく食べましたね。乾麺かんめんを折たって炒めて食べたりしていました。2キロメートル先に牧場があり、当番の男子は山道を歩いて配給の牛乳を引き取りに行きました。大八車だいはちぐるまを引いて農協まで野菜などを引き取りに行くのも男子の仕事でした。



#### 学童疎開

集団疎開の第1陣が東京を離れたのは昭和19年8月4日。全国6都道府県で小学3〜6年生40万人以上が集団または縁故を頼って農村地帯に疎開した。食料不足に加え、ノミ・シラミに悩まされた学童が多かったという。

——授業も受けていたのでしょいか。

最初の頃は授業はなく、しばらくしてから隣の小学校を借りてときどき授業を受けました。でも、そもそも先生がいませんから、勉強はそんなにしなかったですね。農家の手伝いはよくやっていました。

最初、温泉地に疎開した小学校は、温泉に何回も入れるだろうからうらやましいと思いましたが、終戦後、彼らに当時の話を聞くと、お風呂は寝る前に1回しか入れないし、特に食べ物には相当苦労していたようでした。私たちは食べ物もそうですが、疎開先の人たちにとってもよくしていただき、疎開児童としてはかなり恵まれていました。終戦後は、長純寺に疎開していた者たちで「長純寺会」を作り、今でも交流が続いています。

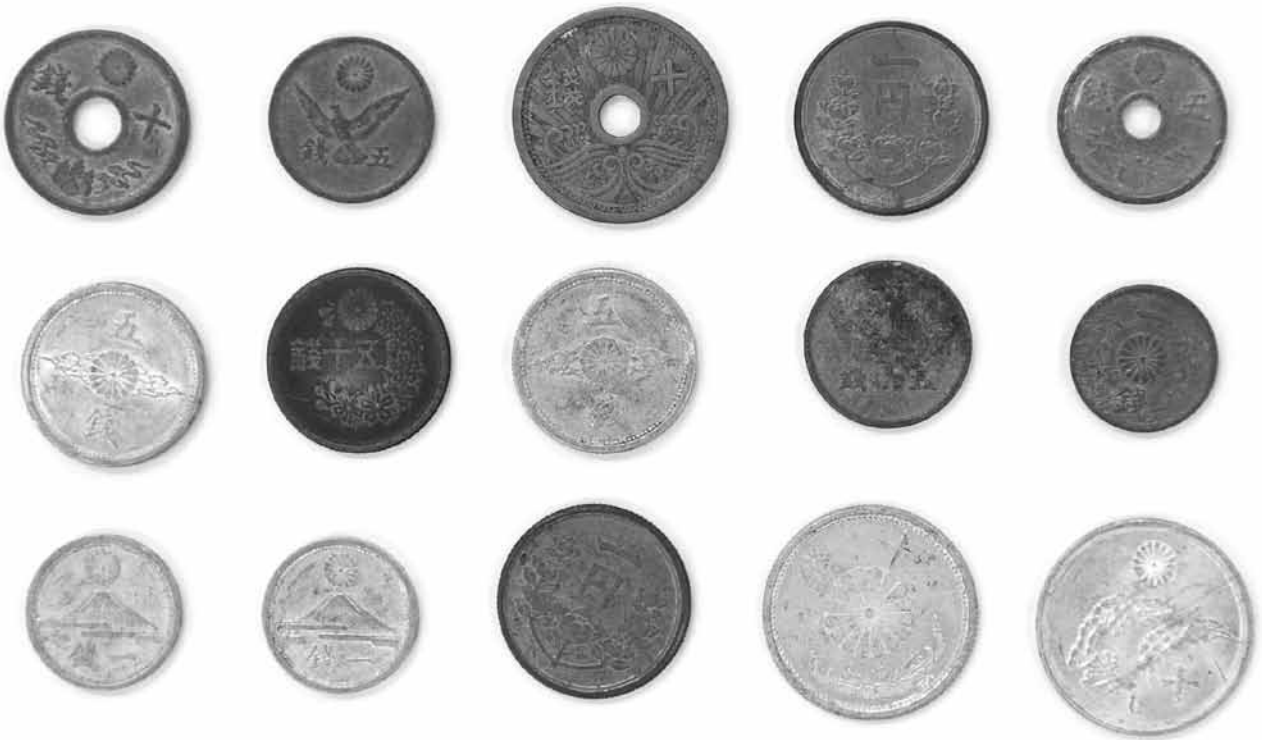
### 疎開から東京に戻って空襲を経験

——鈴木さんは終戦まで疎開をされていたのでしょいか。

旧制中学校の受験のために、翌年3月7日に東京に帰ってきました。帰ってきてすぐに東京大空襲がありました。あのときは驚きました。

——鈴木さんはこのときはどうしていたのですか。

東十条の家にいました。ずっと見ていました。この空襲があつてから、防火帯を作るよう指示されました。環状7号線に予定地があつたのですが、燃え広がらないようにまわりの多くの家



空襲で焼けたお店の金庫の中に保管されていた貨幣

が壊されました。その範囲にうちの石蔵もありましたが、木造ではなかったため、壊されずに済みました。

——東十条は空襲を受けなかったのでしょうか。  
4月13日、14日にかけて空襲がありました。自転車やリヤカーを石蔵に入れて逃げました。

それから8月10日の朝にも空襲がありました。このときは板橋区や王子区などが爆撃を受けました。東十条にも爆弾が落ちて、うちのそばに成立商業学校（今の成立学園中学・高等学校）がありますが、あそこでも何人か亡くなっています。爆弾のために線路も不通になりました。終戦後、新幹線の工事のときには不発弾が出てきました。

——ご家族やお知り合いは無事でしたか。

家族はおかげさまで全員無事でした。でも8月10日の空襲では、成立商業学校に通っていた小学校時代の友達がひとり亡くなりました。

——東京に戻られてから、中学校ではどのような勉強をしていましたか。

私の中学校は英語の授業がありました。校長が東京大学の英語科を出た人で、英語の先生も何人かいました。でも、焼け跡の手伝いがけっこう多かったです。空襲で焼けると幹線道路を整備しなくてはいけないから、スコップを持って行き片付けていました。

——終戦の日のことをお聞かせいただけますか。

当日の朝、正午から大事な放送があるとラジオから流れ、みんなが集まって聞きました。ま

わりの人は「徹底抗戦だ」とか「最後の1人まで戦え」と言われるのではないかと推測する人が多かったですね。

——実際にラジオで玉音放送は聞かれましたか。  
聞きましたが、中学生ですからはっきりとは理解できませんでした。おやじが「戦争に負け

たな」と言ったので、「ああ、そうなのだな」と。戦争は終わったけれど、これからどうなっていくのか分かりませんでした。ただそれ以後、飛行機は飛んでこなくなりましたし、空襲警報も鳴らないのでホッとしました。学校の先生で、それまでは必ず日本が勝つと言っていたのにコロッと態度が変わった人もいましたね。

——終戦後、アメリカ軍の兵士を見かけることはありましたか。

すぐに進駐軍が入ってきました。2、3人で銃を持ちジープに乗っていました。電車で走り出しましたが、車内にも2人くらいいました。ある程度時間がたってから、進駐軍専用の車両が1両作られました。

アメリカ兵を見て、怖いということはありませんでした。ピシッとプレスのきいた服を着てジープに乗ってやって来るから、みんな格好よかったですね。大きな携帯ラジオを持っていたのも印象に残っています。

——お店はいつ頃から再開したのでしょうか。

岩本町の店は2月25日の空襲で焼けました。あとから聞いたのですが、昭和通りの家屋は木造だったので、昭和通りくらいの広さだと火が

### 不発弾

戦時中、本土や近海などに投下された砲弾が何かの不具合により起爆しなかったもの。現在も開発工事や建設現場などで不発弾が発見されることがある。不発弾処理は非常に危険な業務であるため、自衛隊の専門教育を受けた隊員が処理にあたる。



止まらずに、こっちから向こうへ移ったのだそうですね。

終戦の翌年、昭和21（1946）年の夏、焼け野原になっていた岩本町に1800円でバラックを建てました。当時の1800円は国立大学卒の会社員の1年分の給料くらいです。早稲田大学卒だと2万5000円です。昔は、国立と私立でこんなに違いました。出征していた店員たちも復員してきたので、父親が商売を再開し、今に至ります。

——終戦後に人々が努力したからこそ今の世の中があると思いますが、復興に対する思いをお聞かせください。

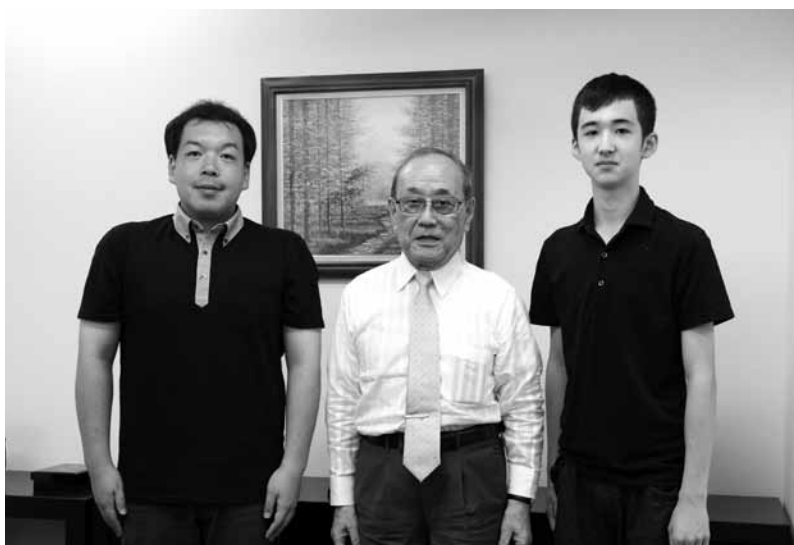
終戦後、日本がこれだけ復興したのは、戦争前までの生活に戻ろうという気持ちが強かったからです。やっぱり、昭和12、13年頃の生活はよかったですね。それから戦争に負けて何もなくなりました。だから、そこまでは達しようと思わずに努力しました。それだけ意欲を持っていました。

それから日本の場合には、なぜアメリカに負けたのかをみんながよく勉強しました。特に品質管理についてはそうですね。アメリカの品質管理というのは大量生産が基準です。アメリカの爆弾も不発弾がすごく多かったんです。日本はそうではありません。不良品を出さないような品質管理を進めました。その努力が、復興への要因のひとつでもあったと思います。

——戦争を経験された鈴木さんから、今の若い

人たちにメッセージをいただけますか。

戦争とは極端に言うところと殺し合いです。やっぱり人間は、人を不幸にするような行動だけにとってはダメですね。戦争は、まさに不幸を生み出すものです。いじめだつてそうです。相手の立場になればいじめられた子は不幸ですね。そういうことが起こらないようにするために、人間は思いやりの気持ちを持たなくてはダメな気がします。そしてやはり、過去のことをしっかりと勉強して行ってほしいと思います。



写真左から、泉さん、鈴木さん、横山さん

# 仲間たちと会津で過ごした1年間

神田練堀町で製本業を営み、町会長や秋葉原街づくり推進連合会長を務めてきた中島光治さん（82歳）。国民学校初等科5年生の時に、集団学童疎開した福島県の猪苗代では、仲間たちと苦労を共にし、深い絆を培ったといえます。

## 日の丸の旗に送られて福島へ

——まず、疎開する前のことを教えてください。  
うちのおやじはここで上製本（背中の丸い、硬い表紙の本）を作っていたんです。私は練堀小学校（当時は国民学校初等科）に通っていました。戦争も最初のうちはずっと、平常な生活をしていました。

——それがやがて空襲も始まってきたわけですね。  
焼夷弾がぼろぼろ落ちるようになってからですよ。アメリカ軍が上陸してくるかもしれないと言われて始めました。焼夷弾って消えないんです。逃げるしかない。近所のたわし屋が燃え、こりゃあ疎開するしかないだろうとなりました。うちが燃えた時も持ち出せたのはミシンの頭だけでした。うちは埼玉の春日部に近い杉戸に母の家があって、芋やトウモロコシを植えて

いました。そこに行けばいいんですが、子供が5人もいて簡単ではありません。だからきょうだい皆バラバラに疎開することになりました。僕は長男だから死んだら困ると、おやじも言って。

——それから学童集団疎開に行ったのですね。  
5年生の時に、会津に行くことになりました。学校ごとに行き先を決めるんですが、校長がくじ引きで負けたそうです。でも会津なら食べ物はいっぱいあると思ってた。おやじがそう言っていたしね。出発したのは昭和19（1944）年8月15日です。3年生から6年生までの希望者全員が行きました。5年生は28人いました。引率は代用教員だった20代の川野先生と寮母さんが1人。練堀町から上野駅までは、日本の旗を立て、沿道でも旗を振って大騒ぎでしたよ。まるで兵隊が戦地へ行くようでした。



なかじま みつじ  
中島 光治

神田練堀町

## インタビューー

泉 政秀（区内在勤者）

横山 嶺州多（中学3年生）



夜行列車に乗り、早朝に猪苗代駅に着きました。野口英世の故郷ですね。3・4年生は駅前の旅館が疎開場所。女子はそこから1時間くらいかかる中ノ沢温泉に行き、5・6年生は3里の山道を2、3時間ほどかけて登り、磐梯山麓川上温泉の旅館「滝の湯」に行きました。裏磐梯の五色沼の近くです。広くて大きな旅館でした。

僕たち5年生はそれから、戦争が終わるまでの丸1年疎開していました。6年生は終戦前に東京に帰って、家に入る前に爆弾でやられて死んだ人はいっぱいいます。親が死んだ人も多かったですね。

### 疎開先では食べ物の確保に苦労

——疎開先での食事はどういうものでしたか。

食事は3食出ました。ご飯と味噌汁。白米じゃありません。丸麦が半分くらい入っていて硬いです。口に入れたら100回くらい噛んでからやっと飲み込んでいました。期待していただけの食べ物は全くない。地元で食い物が無いわけではありません。疎開の子供たちに回ってこないんです。旅館にも米がない。それで皆、山になっっているグミとかアケビを採ってくるんです。変なものを食べて中毒になった者もいます。川に行けば魚はもちろん、ミジンコなど食べられるものはなんでも食べていました。栄養失調で皆やせてしまいましたよ。

——裏磐梯は、冬は雪の多いところですね。

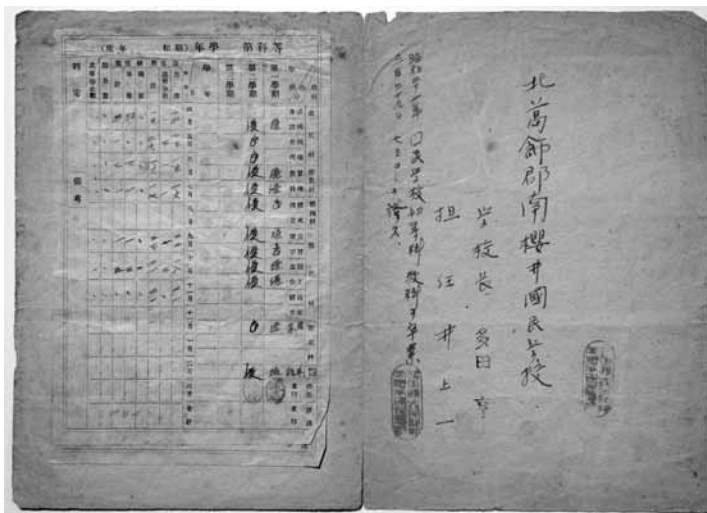
冬になっても暖房もないから、皆で添い寝しました。でも、雪が降ると下から食糧も上がってこなくなりませす。木炭バスも坂を上ってこれない。それで猪苗代の町に降り、「江戸亀」という旅館に移るようになりました。「滝の湯」から歩いて降りました。でも雪の中でみんな歩けない。すると地域の婦人部の人たちが背中に背負って降ろしてくれましたよ。そういう時代だったんです。その年は豪雪で、猪苗代でも4メートルくらい積りましたね。道路も積もった雪が固まってしまい、旅館の前に階段を作って、2階から出入りするくらいでした。

——降りてからは食べ物もよくなったんですか。

町に降りたらアルバイトがあるんですよ。行って仕事を手伝うと食わしてくれる。医者で薬を計って紙に包むとか、酒蔵での酒造りとか、手伝えば昼飯を出してくれるんです。ご飯を食べられるから仕事するわけ。僕にとって初めてのアルバイトでしたね。5・6年生は列車で東京に戻り、神田駅の闇市まで行って物を食べてくる者もありました。

——授業はどんなことをしましたか。

教練が中心でした。川上温泉にいた時は五色沼まで裸足で走りました。砂利道ですよ。だんだん足の裏も強くなりましたよ。軍事教練もありましたよ。銃剣とか言われていたけれど、木刀・竹刀でした。そんなものでエイエイやっていたんじゃないですかね。木刀で戦争し



国民学校初等科の修了証書と通知表

### 教練

「教練」とは教えて熟練させることを意味する。大正14年以降、学校に陸軍将校を配属させ、学生・生徒を対象に、体育を促進し、徳育を養い、国防能力を増進することを目的に軍事に関する訓練が行われた。



たつて負けるに決まっています。でもやることもないから、毎朝振り回していました。川野先生はいい家の生まれで、能をやっていて、僕たちも習ったりしました。猪苗代から会津まで往復13里を「行軍」と称して歩いたこともありま  
す。もうどうしようもないからおにぎり1個  
持って、白虎隊の墓まで行き、全員で写真を撮  
りました。

冬は皆、頼んでスキー板を作ってもらいま  
した。けれどスキー靴がない。革靴や運動靴もな  
いし、長靴だつて持っていない。それで藁で  
靴を編んで、水をぶっかけて凍らせてスキー板  
にくくりつけて滑りました。猪苗代小学校での  
スキー大会にも出ました。疎開児童は皆、スキ  
ーがうまくなりましたよ。

——画家の長沢昇（長沢節）さんとも疎開先で  
出会ったそうですね。

やがてスタイル画の第一人者として「セツ・  
モード・セミナー」を主宰することになる有名  
な画家です。会津の商家の生まれで、同じ旅館  
に逗留していたんです。絵の描き方を教えて  
もらいました。彼はヨーロッパにいたから、原  
爆ができていいるのも分かっていました。引率の  
先生と同じくらいの20代後半で、僕たちの絵も  
よく描いてくれて、本当に仲良くしてもらいま  
した。戦後、「磐友会」という疎開メンバーの  
同窓会を作ったんですが、そこにも毎年来てく  
れて、皆で一緒に旅行にも行きました。



会津若松の白虎隊の墓まで「行軍」した時の記念写真（前列左から5番目が中島さん）

## 終戦時、集団自決の可能性もあった

——福島では空襲はなかったんでしようか。

郡山に来ていましたよ。列車が爆撃されることも多かった。うちのおやじが「面会に行く」という手紙を送っても5回に1回しか来ない。結局来たのは2回くらい。途中で空襲に遭って、手紙が来ないんです。雪の中を駅まで迎えに行っては、悔しい思いをしました。爆撃でガラスが刺さって、血だらけで面会に来た女の人も何度も見ました。3年生では脱走する子もけっこういましたね。旅館が猪苗代の駅前だから、親が面会に来るとついて帰っちゃうんですよ。

——日本が負けると思いましたか。

いや、負けなと思っていました。でも物資がない。爆撃も激しい。僕なんかあの時分は玉砕も考えていましたよ。飛行機に乗ってやってやるつもりでした。知っている中にも、行きだけのガソリンを積んで突っ込んでいった人もいます。

——予科練に入ることも考えましたか。

受けるつもりでしたよ。そのために勉強してました。あの時分はそれが当たり前でした。いい悪いじゃない。国のため、人のため。みんなで助け合おうという風潮でしたから。でもその前に戦争が終わったわけです。

——中島さんは玉音放送は聞かれたんですか。

僕は聞いていません。昭和20（1945）年8月15日は、ちょうど疎開1年目で、皆でお

祝いしようと料理を並べて先生を待っていたんです。でもいつまでたっても来ない。玉音放送を聞いていたんですね。そして真っ青な顔でやってきて、戦争が終わったと言ったんです。先生が手榴弾を隠していたことは翌日知りました。なにかあったら皆で自決するために預けられていたそうです。

それからが大変でした。この先どうなるかわからないし、家も焼けてどうなっているかわかりません。親が亡くなった人もいます。住んでいた場所に帰れるわけじゃないので、皆の行き先が見つかるまで猪苗代にいて、戻ったのは10月頃です。同じ小学校だった仲間たちは、散り散りになりました。

## 戻ってから1年間は埼玉に

——中島さんはどこに戻られたのですか。

帰っても家は焼けてしまったし食べるものもない。しかも1年間福島にいたので勉強も遅れています。それで杉戸の母の家にいき、姉と2人で蚕小屋を1軒借りて住みました。里芋とかいろいろ植えていましたよ。北葛飾郡南桜井国民学校に通い、新制中学の神田一ツ橋中学校を受験するため、先生が夜までずっと教えてくれました。国民学校の生徒は300人くらいいましたが、新制中学に入るのは10人くらい。だからいじめもありました。でもうちは母親方が大地主だったので、別格だったかもしれない。



当時疎開先で交流があった長沢昇（セツ）画伯から送られた絵手紙。この絵手紙が、疎開仲間との同窓会をつくるきっかけに

## 玉音放送

「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び…」とポツダム宣言受諾の詔書を読み上げた天皇ご自身の放送。昭和20年8月15日正午、ラジオから流れ、3年8カ月余の戦争が終結した。

卒業式で進学する者が皆殴られて警察が来たりしたときも、先生に「中島は帰れ」と言われて、恵まれていたと思います。

——製本の仕事も戦後再開したのですか。

そっちもやっていました。朝、まず家の仕事を手伝い、それから学校に行っていました。紙を切る機械もないから、包丁で切っていましたよ。

——東京にはいつ戻られたのですか。

戦争が終わって1年後です。最初は家もバラックでしたよ。なにかもなくなくなったんだから。

——東京は変わっていましたか。

風景はまるで変わっていました。でも、そのことよりも食料がないことが大変でした。食べ物はずいぶん。昭和通りに炊き出しが出て、ドンブリ持って並んで。それでおやじと一緒にリュックを背負って春日部に通いました。母の妹が米屋をやっていたんですよ。そういう親戚があればいいけれど、ない人は着物とか持って行って物々交換していました。でも検閲に遭うと取られてしまう。そのうち僕1人で行くようになり、検閲を避けるため夜の11時頃に浅草から歩いて帰ったりしていました。

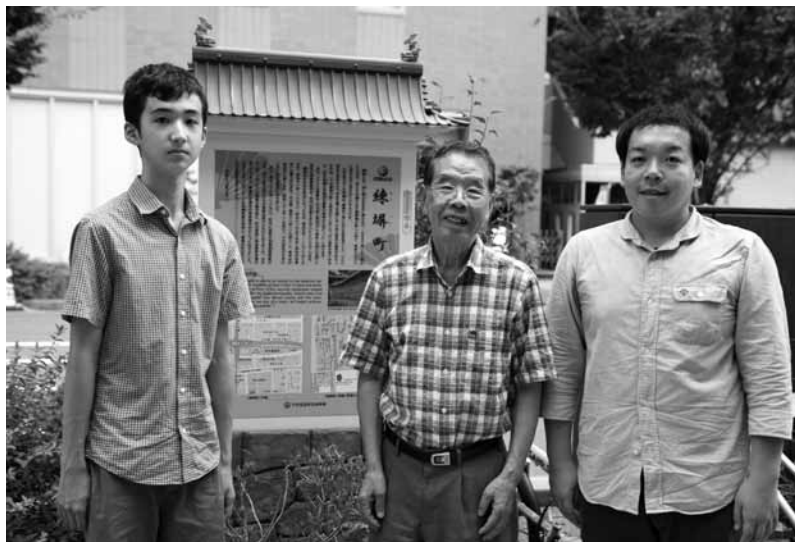
——疎開仲間の同窓会は戦後に始めたのですか。

きっかけは長沢昇さんからの絵手紙なんですよ。僕が疎開先でキュウリを食ってる絵が描いてあって。それを見て、全国に散らばった仲間が集まる会を作ろうと思いいちました。疎開先

では皆、本当に苦労しました。だから団結力が強いんです。「警友会」では僕が幹事になって川野先生や長沢さんを招き、毎年夏になると警梯を訪ねていました。でも仲間も次々と亡くなっていった。70歳くらいで死んだ人はいっぱいいます。僕は82歳まで生きながらえました。その会は平成15（2003）年までやっていました。

——最後に、若い人たちに伝えたいことを。

やっぱり戦争はいけない。学童疎開した人も縁故疎開した人も、皆大変でした。家族を亡くした人も大勢います。何があったのか伝えていかないと、やがて分からなくなります。資料や写真もなくなる。戦争をなくすには、皆が仲良くやるしかない。それを今の子供たちに分かってもらいたいですね。



写真左から、横山さん、中島さん、泉さん

# 河口湖での疎開生活は「わが人生に食い物なし」

豆腐屋の家業を継ぎ、7年前まで営んでいた山目光弘さん(83歳)。永田町小学校6年生のとき、山梨県河口村(現在の河口湖町)に集団疎開し、中学受験のために東京へ戻ってきて空襲に遭う。食糧難で辛かった疎開生活、中学生で経験した学徒動員での労働、東京での空襲の恐怖や当時の暮らしなどを中心にお話しをうかがいました。

## 戦争のことは何も分からなかった

「まず、山口さんご自身と家族構成についてお聞かせいただけますか。」

昭和7(1932)年生まれ、満83歳です。麴町(当時・現在の平河町)生まれで、ずっと麴町に住んでいます。平成5(1993)年に廃校になりましたが、旧永田町小学校に昭和14(1939)年に入学しました。昭和16(1941)年に太平洋戦争が始まったときは小学2年生でした。

きょうだいは4人で、姉、弟、妹がいます。みんな旧永田町小学校出身です。生めよ殖やせよの時代でしたから、1年生から6年生まで全学年にきょうだいがいるというのも珍しくありませんでした。

「当時の永田町小学校の様子を教えてください」

い。

私たちの時代は男女共学ではありません。1学年2クラスで、男組と女組に分かれています。1教室に55名くらいいましたから、全校生徒は660人くらいでした。

戦争についてよく知らずに育ってきましたが、小学2年生のときに太平洋戦争が始まりました。昭和17(1942)年、シンガポールは日本が占領して「昭南島」と言われていました。その昭南島が陥落したときは、小学生みんなで日の丸の旗を持ち、国会議事堂の前で「日本が勝った！」と旗行列をしたのを覚えています。ただ先生の言うとおりにするだけです。いいも悪いも分からなかったです。

「その頃はどのように過ごしていたのでしょうか。」

「軍国少年」という言葉が流行っていました。



やまぐち みつひろ  
山口 光弘

平河町

## インタビュアー

富山愛芙美 (大学3年生)  
千野彩佳 (高校3年生)  
松崎璃々花 (中学1年生)

竹を腰に差し、兵隊ごっこをして遊んでいましたね。いわゆるチャンバラです。自宅のそばに平河天満宮という天神様があるのですが、境内でベーゴマやメンコをしたり、将棋もよくやったりしました。今の将棋とは違い、軍人将棋というのがあり、いちばん強いのは元帥げんすいです。

「欲しがりません。勝つまでは」「ぜいたくは敵だ」、そんな言葉も流行っていて、女性はパーマネット禁止でした。軍国主義でしたからとにかく兵隊さんが最優先で、都電に乗って座っていても兵隊が乗ってくると席を譲っていました。私はまだ子供でしたから、なぜ日本が戦争をしているのか何にも分からなかった。当時の生活をただそういうものだと思っただけで過ごしていました。

## 疎開生活はとにかく「腹減った」

——疎開したときのお話をお聞かせいただけませんか。

昭和19（1944）年9月になると、小学3年生以上はみんな強制疎開をさせられました。私が6年生のときです。お父さんやお母さんの実家など田舎のある人はそちらに行くけれど、うちにはなかったので集団疎開へ行くしかありませんでした。

昔、このあたりは麴町区という名前でした。昭和22（1947）年に麴町区と神田区が一緒になって千代田区になりました。今は23区です

が、当時は35区あったんです。麴町区の場合、集団疎開先は山梨県です。永田町小学校は河口湖、麴町小学校は大月、番町小学校は富士吉田という具合に、みんな山梨県に分散しました。弟は小学1年生、妹は小学校に上がる前でしたから、学童疎開へ行ったのは私1人です。四ツ谷駅の陸橋で家族に見送られ、泣きながら別れました。どこに行くのか分からなかったし、何のために疎開するのか、それも分かりませんでした。

——先生から説明はなかったのでしょうか。

「あなた方は未来の兵隊になる。大切だから疎開するのだ。身体を丈夫にしてアメリカと戦わなければならぬ」と、そのようなことを言われました。けれども、よく理解できませんでした。

——疎開先の河口湖はどんなところでしたか。

私たち6年生の疎開先は河口湖畔の竜宮ホテルでした。冬になると、湖の表面が氷結するんです。氷の厚さが1メートル以上もありました。車なんてないですから、地元の人は下駄の裏に包丁みたいなものを付けた下駄スケートというものを履いて、対岸を行ったり来たりしていました。

——疎開生活はどのようなものでしたか。

なにしろ、食べ物が多かった。河口湖は田んぼがなく、お米のないところなんです。あったのはトウモロコシだけ。毎日、トウモロコシをすり鉢ですって粉にし、水を入れて練ってお団



疎開先の山梨県河口村

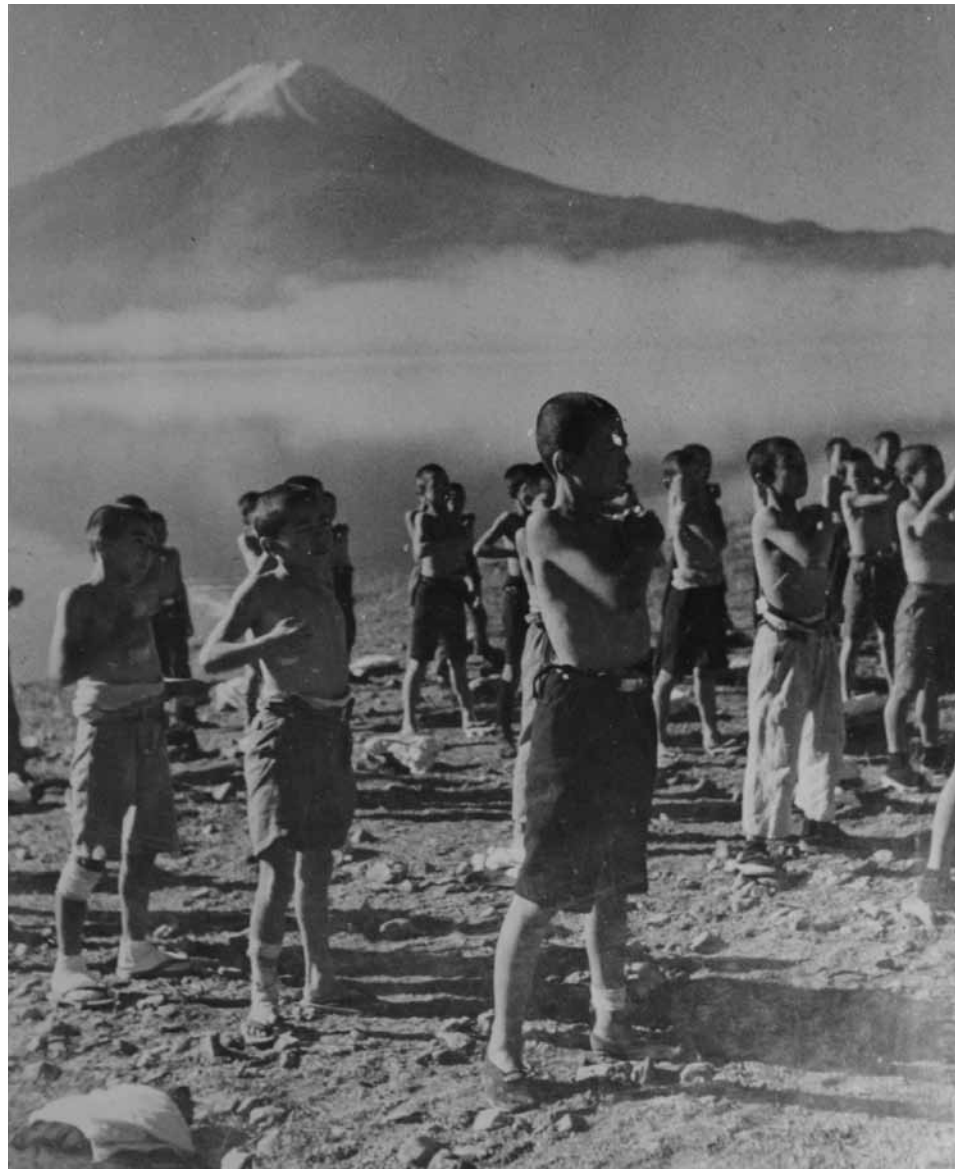
子にしたものをふかして食べていました。鶏の餌みためにボンボンして、まったくおいしくなかったです。

いつもお腹を空かせていて、ミカンの皮なんかも食べました。友達と顔を合わせれば「腹減った、腹減った」です。6年生という小学生意気な年頃でしょう。「人生に悔いなし」という言葉があるけれど、おれたちはそうじゃないな。人生に食い物なし。だな」と言って、先生に怒られたこともあります。6年生でもみんな夜になると「東京へ帰りたい」と言って泣いていました。私もそうでしたけれど、みんな「お母さん、お母さん」と泣くんです。

「中央線歩いて東京へ帰れるかもしれない。脱走しよう」という話も出ました。ところが、途中に三つ峠という山があって、それを越えなければ大月には抜けられない。小学生の足ではとても無理で諦めました。でも、よその学校では脱走した例もあるらしいです。

男の子は毎朝、裸で乾布摩擦。女の子は食事の配膳をしたり、河口湖で洗濯をしたりしていました。男は丸坊主だからいいのですが、女性は髪の毛を伸ばしているでしょう。みんなシラミで大変でした。リュックサックを背負って山に入り、薪を取ってきて燃やしてお湯を沸かし、そのお湯で頭を洗ってシラミを落としていましたね。

友達とは戦争の話もあまりしなかったし、とにかく食べ物の話とどうやって線路を歩いて帰



疎開先で乾布摩擦をする男子生徒たち（永田町国民学校）

るか、そんな話ばかりしていました。食べ物がないというのは本当に辛くて、なにしろ東京へ帰りたかった。たった半年の疎開生活でそうでした。

——疎開先では授業はどうしていたのですか。

地元の河口小学校へ通いましたが、1週間に2回くらいしか行かなかったですね。河口小学

#### 乾布摩擦

手ぬぐい1本で手軽にできる皮膚強化法として広く奨励された。国民学校では校庭で全員が上半身裸になり、先生の号令でゴシゴシ。集団疎開先でも風邪予防の目的で乾布摩擦を励行した。

校は2階建てで、障子の貼ってある校舎でした。でも、そこで勉強した記憶はほとんどないです。あとは、付き添いの先生がホテルの部屋で勉強を教えてくださいました。

——地元の小学校では、東京から疎開してきたことに対して何か言われたりしませんでしたか。

「疎開っ子」と言われましたね。「疎開っ子が来たから逃げろ」「疎開っ子と口をきくな」と言われたこともあります。たいして気にはしなかったですけど。

——疎開先では何を遊んでいたのですか。河口湖のボートに乗ったのは覚えていますが、あまり遊んだ記憶はないですね。とにかく毎日が「腹減った」「帰りたい」。そればかりでした。

### 学徒動員の労働で松の根を掘る

——疎開生活は半年とのことですが、その後は東京に戻られたのですか。

私たちの時代は、小学校を卒業したら5年制の中学校（旧制中学校）に入ります。旧制中学校は義務教育ではないから入学試験があります。3月が受験ですから、翌年の2月に東京へ戻ってきました。

——東京に戻り、家族と再会できたときはどんな気持ちでしたか。

両親に会ったときはもう涙・涙です。あれが

親子の情というのでしょうか、親のありがたさが身に染み、今まで育ててくれたことに感謝しました。

——受験後はどうされたのですか。

早稲田実業学校に進学しましたが、入学してからまた苦勞をしました。というのは、中学生は学徒動員がかかります。4月に私も召集されました。飯田橋駅から汽車に乗せられたのですが、窓に鑑戸が下ろされていて、どこへ連れて行かれるのかも分かりません。「もう生きて帰れないかもしれない」と、飯田橋駅で見送りにきた母親と水杯し、「お母さん！」と号泣しながら別れました。

——行き先も分からなかったのですか。

汽車が着いたら静岡県御殿場でした。今、陸上自衛隊の滝ヶ原駐屯地があるところです。労働といっても中学1年生だから技術的なことは何もできません。だから、松の根っこを掘られました。そのときは何がなんだか分かりませんでした。あとになって聞いたのですが、松根油という油を作るんです。日本には零戦という戦闘機がありましたが、なにしろガソリンがない。インドネシアなど石油のルートはすべて封鎖されていますから。戦闘機用の油を作るために、松の根っこを掘るわけです。

3〜4歳上の見習い士官がとにかく怖くて。剣道の竹刀で膝やお尻をひっぱたかれて毎日泣いていました。毎朝点呼があって、学生服を着て整理するのですが、慌てて行くものだからボ

### 松根油

松の根や枝を乾留して取り出す油。航空機用ガソリンの代用品として政府は昭和19年秋、松根油緊急増産対策措置要綱を定め、子供たちまで総動員して松の根を掘らせた。しかし乾留の燃料不足のため松の根は放置されたままだった。



タンが外れていたりする。そうすると、「貴様ら、ボタンはどうしたんだ！ いらなから外しているんだろ！」と言って全部もぎ取られるんです。団結力を植え付けるため、当時は何もかもが共同責任です。例えば5人の班だとすると、1人が失態をすればみんなやられてしまう。「中学生にもなって何をやっているんだ！」と、スリッパで顔をひっぱたかれるのです。そのとき、まず言われるのが「歯を食いしばれ！」。奥歯を噛みしめてひっぱたかれると「ありがとうございました！」と。

——そのときはどんな気持ちでしたか。

悔しいという気持ちはなかったです。「天皇陛下のためだから」と必ず言われましたから、自分が悪かったと思うしかないですよね。せっかく中学に入るために東京に帰ってきたのに、その動員がいちばん辛かったです。

### 焼け落ちた学校で行われた青空教室

——御殿場での労働はずっと続いたのですか。

20日ほどして学徒動員が終わり、東京に戻ってくることができました。でも、戻ってきてから空襲が激しくなりました。東京に落とされていたのは、焼夷弾という油脂を使った燃焼性の爆弾です。B29が1発の焼夷弾を落とすと、中に入っている1本1本が引火物を撒き散らして炎上させます。木造の日本家屋が多かったから、ほとんどが焼けてしまう。風は火を呼び、火

は風を呼ぶ」という言葉がありますが、火事になるとすごい風が吹いてあっという間に延焼するんです。

3月10日が本所や深川方面、4月13日～14日にかけては神田区が空襲に遭いました。麹町区が焼けたのは5月25日の空襲です。

——3月10日の空襲のときはどうだったのでしょうか。

その日は寒いなんてものじゃなかった。空襲は麹町から見えていました。皇居の方の空が真っ赤に染まっている光景は今も忘れられません。

——5月25日の麹町の空襲のとき、山口さんはどこに逃げたのですか。

男は中学生になると、防空壕に入っただけはいけません。アメリカ兵が来たら、逃げずに竹槍を持って戦えと言われていました。町には在郷軍人といって兵隊から帰ってきた大人が大勢おり、「日本のために戦え！」と怒られるわけです。

3月10日の空襲で神田地区はすでに焼けていたし、ニコライ堂はロシアのものだから焼夷弾を落とさないだろうと、私は近所の人たちとそちらへ逃げました。

——ご家族も無事でしたか。

私が防空壕に入れないから、家族バラバラで逃げることもありました。今の全共連ビルのところが崖になっていて、そこに横穴式の防空壕が掘られていたのですが、母親たちはそこへ逃げました。今思うと、よく助かったと思います。



河口湖に浮かべた舟に乗る児童たち（永田町国民学校）



空襲が終わって、麴町へ帰ってきたら町が丸焼けで何もなかったです。このあたりで残ったのは、英国大使館、国会議事堂、私の母校の永田町小学校の3つだけです。国会議事堂はB29から爆撃されないよう、とんがった屋根に黒い網をかぶせていました。英国大使館は自国のものだから焼かないですよ。無差別爆撃といっても、きちんと計画されていたんです。

その空襲では、多くの人が亡くなりました。麴町警察署の隣は麴町区役所だったので、警察署にはさすがに逃げ込めなくて、みんな区役所に逃げていました。でも、区役所に逃げた人は、まわりが焼けたため蒸し焼きになって死んでしまった。大八車に荷物をいっぱい積んだまま傾いて死んでいる人も見ました。亡くなった人の処理の仕方がまたものすごいんです。昔の電信柱は木で、腐敗を防ぐために油脂が入っているのですが、それを切ってきて広場に槽を組む。それを燃やしてどんどん遺体を焼いて。身元の分からない方がたくさんいたと思います。焼いている光景も見ました。もう何と言ったらいいのかわからなかったです。

——ご自宅も焼けてしまったのですか。

はい。自宅が焼けたので、永田町小学校の体育館で仮寝をしたり、防空壕で近所の人たちと一緒に生活したりしていました。防空壕生活は大変でした。狭い空間に大勢が入っているので、夜トイレに行って帰ってきたら寝る場所がありません。雨の日は中に水が入ってきてしまう。

もう、あんな思いはしたくないですね。しばらくしてから、父親たちと焼けたトタンでバラックを建てました。

やっぱり食べ物に関してはすごく苦労しました。食糧は配給制度で、お米なんて1週間に1回配給があればいいほうです。とにかく食べ物が多かったので、国会議事堂の敷地でカボチャなどを作っていました。近所ということで大人たちがお願いしたのではないのでしょうか。カボチャ泥棒が出るから、交替で見張りをさせられました。他にも、植木鉢にはキュウリやナスなど、とにかく食べられる物をみんな植えていました。

防空壕生活のときは外で料理をしていました。一斗缶(石油缶)に穴を開けて上に鍋を置き、下から薪で火を焚いて煮炊きをしました。お風呂も外の五右衛門風呂。ドラム缶に薪でお湯を沸かし、下駄を履いて入っていました。

——通っていた中学校はどうなったのでしょうか。

4月18日の空襲で早稲田地区が焼けました。今は国分寺に早稲田実業高校がありますが、当時は早稲田大学の大理講堂のすぐ脇にありました。校舎は木造で、ヨーロッパ風の素敵な建物でした。それがB29の爆撃でやられて丸焼けになったのです。勉強なんてできない状況ですが、校舎はないけれど「青空教室」という名前で授業が行われ、天気の良いときだけみんな学校へ行きました。雨が降ると休みになるから喜んでいましたけどね(笑)。



——外で勉強をしていたのですね。

机はどうしたかというところ。東京には、今の都営住宅や区営住宅みたいな形で木造平屋の住宅がありました。昔は、台所の流しは木でできていたんです。板に水が流れる穴があいていて、足が4本付いている。どうやって都合をつけたのか分かりませんが、それが学校に配給になり、生徒みんなに配ってくれました。その木の流しを裏返しにして、机がわりにして使っていました。

——中学校では軍事教練はありましたか。

動員先の滝ヶ原でやりました。竹槍で前へ前へとつづく訓練です。そのときにも教官に絞られました。辛くて、辛くて。ああなると涙も出なかったです。

——空襲後の町の様子はどうでしたか。

終戦の少し前、このあたりも兵隊さんがたくさん歩いていましたが、彼らは靴を履いておらず、地下足袋でした。お祭りなどで仕事師（職人）が履いている、足袋の底にゴムがついているものですね。もともと、軍靴は今のバスケットシューズが長くなったようなものでした。靴すらない状態です。それでも、日本が負けるとは思っていませんでした。

——玉音放送を聞いたときのことを教えてください。

父親や近所の人と一緒に聞きました。今のよう

に分からなかった。ただ、分かったのは「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」という言葉です。近所のおじさんが「戦争が終わった」と教えてくれ、それでようやく分かりました。皆さん、そういう心境だと思いますか。

——それまでずっと勝つと思っていて、急に「戦争が終わった」と言われたらびっくりします。

本当にそうです。皇居の広場に集まって二重橋の方へ向かって最敬礼をしている写真を見たことがあるでしょう。大人たちはみんなあの姿です。天皇陛下に申し訳ないと泣いている人もいました。

ただ、あと3カ月も戦争が続いていたら、私たちの年代はこの世にいなかったかもしれせん。今は物の使い捨ての時代と言うけれど、特攻隊を見ても分かるように、当時は人間の使い捨ての時代でしたから。

### 英語の授業に「よまご」

——終戦後、町はどのような状態だったのでしょうか。

財閥は解体され、町会組織も解散させられました。マッカーサーは日本の団結力を重要視したのです。団結したら何をやるか分からないと。町会行政というものは、昭和27（1952）年、サンフランシスコ平和条約の発効をもって禁止が解かれるまでなかったんです。

財閥解体に伴って、昭和22年に新制中学校と



男子生徒・女子生徒の笑顔が並ぶ疎開先の校舎から（2枚とも永田町国民学校）

して設立された麴町中学校は、安田財閥の創始者・安田善次郎から土地を無料で譲り受けました。それまで麴町中学校には校舎がなく、永田町小学校を借りて授業を行っていました。いいか悪いかは別にして、今考ええると恩恵をこうむっている部分もあったかもしれません。

——終戦後はまた学校に通ったのでしょうか。

はい。早稲田実業学校は、当時は男子校で2クラスありました。いちばん困ったのは英語です。「敵の言葉を使うな」とずっと言われてきましたから、いっさい英語は使っていませんでした。戦争中は「ポケット」と言うのとひっぱたかれましたから。「何て言うんですか」と聞いたら「物入れと言え！」と。終戦後、急に英語の先生が来ましたが、何を言っているのかわからない。最初に覚えたのは、犬はDog、猫はCatです。「ネズミは？」と聞かれて「チュー」と答えたら立たされました（笑）。

——英語を学ぶことにとまどいはありましたか。

ある意味、毎日ですよ。英語の時間が嫌で、仮病をつかって逃げたこともありましたね。英語の試験も当然できませんでした。英語ができる友達が1人いて、解答をみんなが写すんです。その人が間違えると、みんな間違えていました（笑）。

在学中に学制改革で新制中学校・新制高校ができ、もともと私たちは5年で卒業するはずだったのですが、それが1年延びて新制高校を卒業ということになりました。昭和26（1951）

年の卒業になります。まだまだ、街にはアメリカ兵がたくさんいました。

——実際にアメリカ兵を見ることもあったのですか。

毎日、見ていましたよ。今の銀座4丁目の交差点は信号があるけれど、当時の交通整理はアメリカ兵がやっていました。

——アメリカ兵を見てどう思いましたか。

格好いいと思いましたね。

——怖いとは思わなかったのですか。

そういうイメージはありませんでした。麴町にもアメリカ兵の宿舎がありました。国立劇場に国立演芸場がありますが、あのあたりが進駐軍に接收されて、カマボコ兵舎（へいしや）というアーチ型の兵舎ができました。麴町はGHQの本部がある日比谷に近いので、幹部クラスが住んでいたのです。家族連れの人たちが住む兵舎でしたので、婦女に対する問題などはなかったですね。みんな自動車で日比谷まで通っていました。兵舎では、近所の人を雇用して働かせてくれました。仕事がなかったので、助かった人もずいぶんいましたよ。敵国に使われるなんて考えたこともなかったのですが、生活のためには仕方ありません。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」という言葉がありますが、確かにそういうこともあると思います。

——早稲田実業を卒業したあとはどうされましたか。

法政大学の経済学部に進みました。卒業後は



昭和22年当時、GHQの総本部には星条旗が掲げられていた（現在はDNタワー21）

### GHQ

General Headquartersの略。総司令部の意味だが、一般にポツダム宣言受諾、敗戦に伴い対日占領政策遂行のために設置された連合国軍総司令部のこと。本部は日比谷の第一生命相互ビルにあった。対日平和条約発効とともに廃止された。

就職するつもりでしたが、おやじが脳溢血で倒れて亡くなって。私の家は麴町で豆腐屋をやっており、今でいう総理官邸や陸軍省に豆腐を納めていました。大豆の仕入れも都合をつけてもらっていたので、戦争中も商売はできていました。おやじが亡くなって跡を継ぎ、おふくろのためと思って夢中で働きました。

——豆腐屋をやりながら大学に通われていたのですか。

そうです。豆腐屋は朝が早く、夜も早く寝なくてはいけないから、夜間の学校に行けないんです。私は友達が多かったので、彼らが出席を取ってくれたり、ノートを見せてくれたりと助けてくれて、無事に卒業できました。友達は本当に大切だと思います。

——戦争という体験を通して、山口さんが人生でいちばん大切にしてきたことは何でしょうか。

友情です。日本には、わが身をつねって人の痛さを知れ、ということわざがあるように、自分が言われて嫌なことは人にも言わないことだと思っています。相手が傷つくようなことは言わない。たとえそう思っている、自分の胸の中にしまっておく。時間がたつとそういうった気持ちも消えていきますから。

それから、家庭においても笑いを絶やさないと。先祖を大切にすることももちろん必要ですが、泣いてばかりいないで前へ進むことも大切です。涙の中にも笑いを携えて行動するほうがいい。悔しい、悲しいという気持ちは誰にで

もあります。「なぜ、私ばかり」と思わず、気持ちを切り替えることです。

——もし戦争がなかったら、ご自身の人生は変わっていたと思いますか。

変わっていると思います。今の世の中も変わっていると思います。ただ、戦争を礎にして今日があるということは言えると思う。戦争があったことよって今の平和な時代がきたと。私たちの場合はそういうふうと思うほかありません。でも、私たちが不幸だったかということ、そういうことは言ってはいられなかった。子供を持ち、孫を持ち、一生懸命に働いてきました。それで現在があると思っています。

——今回は貴重なお話を聞かせていただいたとても勉強になりました。若い世代の私たちに伝えたいことがありますら、一言お願いします。

私たちは「お国のために死ね」という教育を受けてきました。親から授かった命をなくすというのはむごいことです。平和な時代に生まれ、飢えを知らないだけでもあなた方は幸せです。だからこそ、絶対に戦争はしてはいけない。

人間は一人で生きていくわけではないのだから、自分がこういうことをすると他人に迷惑がかかる、そういう気持ちを絶えず持って生きていっていただきたいと思います。これからの社会を背負って立つ若い人がそういう気持ちで頑張ると、日本はもっとよくなります。どうか頑張ってください。



写真左から、松崎さん、富山さん、山口さん、千野さん



疎開先の河口湖で洗濯をする女子生徒たち（永田町国民学校）



笑顔の児童たち（永田町国民学校）

